

Title	<書評>中ノ堂一信編『すぐわかる作家別やきものの見かた』
Author(s)	清水, 愛子
Citation	デザイン理論. 46 P.208-P.209
Issue Date	2005-05-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52724
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

中ノ堂一信編

『すぐわかる 作家別 やきものの見かた』

東京美術 2004年

清水愛子／京都造形芸術大学非常勤講師

近年では陶芸教室といった習い事の範疇にとどまらず、個人で制作環境を整え、プロ顔負けの作陶をおこなう愛好家も珍しくはなくなった。やきものは買い求め鑑賞する対象から、次第に自らの生活を彩り表現する媒体へと移り替わりつつあるようだ。さらに書店へ足を運べば、その勢いを煽るかのようになり、必ずといってよい程やきものコーナーが常設されており、そこには歴史、製作技術、鑑賞方法など幅広い種類の本が、入門から専門書まで、数多く並んでいる。本書もそうしたコーナーの一角を彩ることを定められた本である。

本書を手にするときまず目に入るのは、「すぐわかる 作家別 やきものの見かた」という大きく、そしてわかりやすく表紙に書かれたタイトルである。一見、初心者向けの入門書のように受け止められるが、そこ・ここにある単なるやきものガイドブックとは少々趣が異なっている。本書は、全体として日本のやきもの価値の系譜を概観できるよう配慮されている。個々の作家別作品紹介は見開き2頁を使って、作家の主な活動、略年表、代表的な作品一点とその作品の見かた等、多くの情報が盛り込まれている。その結果、多角的な視点を内包した作品紹介に成功しており、上級者までもが十分堪能できる内容となっている。

さらに本書の特徴は、やきものをみる上で最低限知っておきたい基礎的知識がしっかりと押さえてあり、どのレベルからもアプローチできる点である。まず、最初の頁には、作家別やきもの年表があり、メインの作家別作品紹介の後には、茶碗、壺、瓶、皿・鉢とい

う器の形をイラストであらわし、口縁、胴、高台といった各部の名称をわかりやすく説明している頁がある。続いて、本書を締めくくっているのは、7頁にもわたる詳細なやきもの用語解説である。

このような構成がなされた理由として、意匠学会会員である編者中ノ堂一信氏が序で、「陶芸への知識を豊かにするためには、技術とともに美意識を高め、鑑賞眼を養うことが肝要」と述べている。続いて、その鑑賞眼を養うためには、過去・現在の数多くの優れた作品に接し、その価値を鵜呑みにするのではなく、自らも発見しようとする力をつける必要があるという。さらに、より一層深めていくためには、作品鑑賞とともに、それを生み出した制作者や時代背景への理解が必要であることを主張している。このような目的のもと、本書は、「日本の陶芸史に大きな足跡を残した」48人を選定し紹介するという大胆な形式をとっている。

本書の構成は目次を一読すればわかるようにまとめられている。まず江戸時代、明治時代、大正昭和時代と大きく三つの時代にわけられている。江戸時代では、「窯元と文人陶工の時代」、明治時代では「西欧世界と製陶家の時代」、大正昭和時代では、「個性制作と陶芸家の時代」と、各時代の陶磁器制作の特徴によって分類されている。そしてこの三つの時代に活躍した、あるいはその後の日本の陶芸界に影響を与えたささされる制作者を取りあげているわけである。また、目次ではそれぞれ一言で端的に制作者の紹介がなされており、まずそこで各作家の簡単な概説を受け

ることができる。

ここで選ばれた作家と、その作家の簡単な紹介を見比べつつ、読み進めていけば、制作者の特性とともに、編者の個性をも同時に把握できるという点は興味深い。

本書は、やきものの初心者には審美眼を鍛える入門書として、上級者には視野を広げるバイブルとして活用できるものと思われる。